すずめを打つ

小川未明

青空文庫

風が吹くと、木の葉が、せわしそうに動きました。空の色は青々として、秋がしだいに深くなりつつあるのが感じられます。朝、まだうす暗いうちから、庭さきの木立へ、いろいろの小鳥が飛んできてさえずりました。ちょうど、休日だったので、ご飯がすむと、清くんは、縁側へ出て、新聞を見ていらっしゃるお父さんのそばへいって、自分もゆっくりした気持ちで庭をながめていました。

すずめまで、他の渡り鳥のように、元気よく木の枝や、屋根の上で、鳴いていました。このとき、空気銃を持った少年が、かきねの外を通りました。

「秀ちゃんの、兄さんだ。」

清くんは、すぐ庭へ下りて走りました。まもなく、木戸口から、少年をつれて、入りました。

「どこに？」

「ほら、あの木の枝にいるじゃないか。」

少年は、やっとわかったとみえてうなずきました。そして、銃を持ちかえると、ねらいをつけました。同じく、お父さんも、その方を見ていられたが、あのすずめは親すずめと子すずめらしい。親すずめは、自分だけ逃げようとせず子すずめをかばうであろう。それがために、子供の身がわりとなって、打たれるかもしれない。どうぞ、神さま、たまがあたりませぬように！　と、心で念じていられたのです。

また、少年は打ちそこなっては、友だちや、友だちのお父さんの見ている前で、みっともないと思いました。それで、しんけんでした。そのうち、シュッと、するどく空気を切って、たまの飛ぶ音がしました。いままで鳴いていた鳥の声はやんで、同時に、なにか、ぱたりと下へ落ちたのでありました。

「あたった！　お父さん、秀ちゃんの兄さんは、うまいでしょう。」

こう叫んで、清くんは、縁側の方をふり向きましたが、いつのまにか、お父さんの姿は、そこにありませんでした。正直にいうと、お父さんは、止めさせる力がないのを恥じて、逃げられたのでした。元気な少年たちには、もとよりそんな老人の気持ちなんかわかりません。二人は、菊畑をわけて、落ちたすずめをさがしました。すずめはじきに見つかりました。

「君のお父さん、すずめすきかい。」と、少年がききました。

「ああ、大好きだよ。」と、清くんは答えました。

「これ、お父さんに、あげてよ。」と、少年はすずめを清くんにあたえて、ひとり幸先のいいのをよろこんで、野原の方をさして出かけました。

清くんは、家へ入ってから、すずめをお父さんに渡すと、お父さんは、すずめを掌にのせて、しばらく考えていられましたが、なまなか道理をいいきかせて、晴れ晴れとした子供の心を暗くしてはならぬと思われたので、

「それは、ありがとう。だがきょうは、仏さまの日だからね。」といって、あとで、だれも気づかぬ間に、庭の木立の下へ、すずめを埋められたのでありました。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集　13」講談社
　1977（昭和52）年11月10日第1刷発行
　1983（昭和58）年1月19日第5刷発行
底本の親本：「心の芽」文寿堂出版株式会社
　1948（昭和23）年10月
※表題は底本では、「すずめを打《う》つ」となっています。
入力：特定非営利活動法人はるかぜ
校正：酒井裕二
2018年4月26日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（https://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

すずめを打つ

小川未明

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/